リンゴヒゲナガゾウムシ

澄川森林のE4区で西野棟梁が建築中の東屋資材の木材の上を歩く美しい薄緑色の小さな虫が目に止まりました。取り敢えずデジカメで撮影。帰宅して画像を拡大して図鑑をめくりまして、リンゴヒゲナガゾウムシと判断いたしました。1㌢にも満たない 8㍉ほどの虫ですが、触角は体長ほどの長さで、たしかに相対的にヒゲナガにちがいありませんが、六本脚の腿節のモリモリ感が凄いじゃありませんか。画像の記録は2015年6月6日12時20分でした。

いろいろ調べまして、分布が本州中部以北から北海道にかけて生息する、日本固有種とのこと。頭にリンゴとついていますし、りんごの葉やクリの葉を食べるとの記事がありましたので、てっきりリンゴの害虫かと確認したくて調べてみましたが、害虫名はずらり並ぶのですが、この虫の名はリストにあがっていません。クリについても害虫を調べてみてもこの虫の名はでてきません。図体も小さくて、数も少ないのでしょう。食べるにしてもつつましやかで、害を及ぼすほどの食べ方ではないのでありましょう。澄川森林E区にはリンゴの仲間のミヤマザクラと野生のクリの樹がありますので、この虫がいるのは当然でありましょう。

北海道在棲のゾウムシ科の虫では最大のオオゾウムシで12～24㍉ですので、殆どが10㍉未満の小さい甲虫たちなので、あまり目に止まりません。最小はアイノシギゾウムシとやらで3.5㍉でしかありません。昆虫少年時代でも標本箱の中にまったくいなかったと記憶しております。

ネットで検索していまして人の指先に止まった状態のこの虫の画像が目につきましたので、拝借いたします。相対的な大きさがよくわかりますのでご確認ください。

口吻が長くのびていて象の鼻を思わせることから種名とされたのですが、この虫はそれほど長くはありませんので、ゴミムシの仲間かと思ったほどでした。ゾウムシたちは口吻の先端の大顎は小さくて素手で捕まえても噛まれる恐れはまったくありません。

解剖学者で東京大学名誉教授の養老孟司氏は余技として半端ない昆虫オタクで知られていますが、特にゾウムシたちを愛好されていて、筆者は同い年の独りよがりの誼もありまして、昆虫関連の著作やテレビインタビューなども好んで拝読・拝聴している次第でありました。（記　高野）